



善光寺収蔵の茶器

喫茶去

善光寺に収蔵される工芸品の中に

栃木県益子の陶芸の名匠浜田庄司先生の作品が数点あり、茶会の席で折

にふれ用いられております。これは

善光寺の本寺光真寺が大田原である

という地縁にもよりましようが、方

丈が愛蔵する由縁は浜田先生の人間

としての立派さ、工芸の正道を行脚

した陶匠の作が持つ風格に対する敬

念によるものでありましよう。

茶盃は浜田先生が陶匠として最も

心を込めて取り組まれたものであり

まして、確かなるくろの技、削りの

研えが力に充ちた姿に感じられます。

益子の地釉である木灰の釉薬を化粧掛けて、それに鉄砂で簡素な草花文をおきますが、描きに描いて文様としてこなし切った自在の筆使いは、自ずと無事の美に結ばれています。

左頁は水指ですが、胴の上半分に

灰釉を、下半分には鉄釉を掛け分け

ていますが鉄釉が乾かぬ間に指で文

様を描く指描きと呼ばれる手法を用

いております。この手法は李朝の永

東浦窯のものや古丹波など民窯の雑

器にみられるもので、作者はこの単

純素朴な手法を使って、勢いのある

文様をつけています。茶器をことさ

らに意識せず民窯のたくましさの内

にもった水指と申せましよう。

日本民芸館主事

佐々木 潤一